

〔研究ノート〕

## 災害復興の国際学へのアプローチ －救荒作物の地域食文化への伝承に関する研究手法の確立－

海津ゆりえ\*

〔Research Notes〕

### An Approach to International Studies on Disaster Recovery Establishment of Research Methods for the Transmission of Famine Crops to Current Local Food Culture

Yurie KAIZU

#### Abstract

The Tohoku region has been hit by earthquakes, tsunamis, and famines for many times. Since the Edo period, people in this region have utilized guidebooks what to eat during emergency in order to survive. This study aims to examine the evolution of the Northern Tohoku region's daily diet from then to now. For this study, a field survey was planned in a community within Ninohe City, Iwate Prefecture. This study clarifies the process of the investigation. In the procedure, the list of plants described in past documents and guides were matched with existing vegetation. And a list was created in which photos and illustration materials of the listed plants extracted from the said documents. The study also includes an on-the-spot questionnaire for the community, designed using a commodity software called "Microsoft Excel".

#### はじめに－研究の背景と目的

##### (1) 研究の背景

災害という言葉には、「災い」と「害」が含まれている。その受け手は人であるが、自然による災害＝天災は極めてまれにしか起こらないため、人は生活が再建されると前の災害を忘れてしまう。寺田寅彦は、“人は何度同じ災害にあっても決して利口にならぬ”と記し、かの「天災は忘れた頃にやってくる」という有名なフレーズが生まれた。これを人間の愚かしさを指摘する教訓として自らを戒め、個人が引き取ってしまえばそれまでである。だが、この愚かしさこそ人間なのだとすれば、その前提から始まる防災や復興の可能性を発展的に考えることができる。

東北地方は、国民の命を支える食糧生産を生業の中心とする「生産文化圏」であることは誰もが認めるところである。しかし東北地方は、古来より、地震や津波、冷害、飢饉など、様々な自然災害に襲われ、その都度、多い時には数万人に及ぶ死者を出してきた地域でもある。2011年に発生した東北太平洋沖地震津波(以後、東日本大震災)では、15,899人が亡くなり、自治体別に見ると陸前高田市では人口の約7%に相当する(谷, 2012)。歴史を振り返れば、830年(天長7年)の「出羽天長大地震」での「百姓15人死亡、100人負傷」との記録に始まり、それ以降2011年までに、記録に

---

\* 文教大学国際学部国際観光学科教授

残されているだけでも16回もの地震と津波に遭遇し、時によっては人口の30%が失われるような災害にも遭遇している(表1)。自然災害全般に目を転じると、冷害や干ばつ也多発し、東北全体では1694年から1838年までの間に38回もの飢饉に見舞われ、例えば1783年(天明3年)の大凶作大飢饉では67,000人もの人々が餓死するに至った(表2)。

しかし、このように幾度も災害に遭遇してきたにも関わらず、東北の人々は立ち上がり、生活を再建して生を繋いで来ている。室崎(2021)は、復興には世直しと立て直しがあり、世直しは“改革”的な取り組みを、立て直しは“回復”的な取り組みを指すと述べている(括弧は筆者)。言うまでもなく、先に求められるのは立て直しであるが、これには「4つの生」と「4つの自」が必須であり、4つの生とは生命、生活、生業、生態であり、これらが取り戻されることが回復を支えると指摘する<sup>(注1)</sup>。このうち生きることに直結するのは「生命」「生活」であり、その基盤に「生業」「生態(生活環境の基盤となる生物多様性)」があると読み解ける。住む場所を移すことができないという制約もあったであろうが、東北の人々がこの地で再び「生命」「生活」を取り戻すエネルギーを支えたものは何であったか。本研究では、度重なる飢饉を生き延びてきた術に着目し、これが地域の知恵としていかに伝えられ、継承されてきたのかを明らかにするための手法を構築した。

北東北地方では、気温・水温が冷たく、大半の日本列島では育成できるイネが育ちにくい。加えて沿岸域では時折ヤマセが押し寄せて寒気を運び、農作物に冷害をもたらしてきた。宿命的とも言える飢饉に対して、人々は多様な品種の穀類を育成して日々の食をつなぐ「雑穀」を生み出し、地域の食の知恵として、生き残った人々を通して伝えられてきた。この知恵は生活の中で活かされ、今日の雑穀文化を形成するに至っている。また主食となる雑穀以外にも、多種多様な植物を食してきたことが、地域で出会うさまざまな郷土食や郷土菓子の中に見ることができる。では実際に、どのような植物が「生命」「生活」をつなぐものとして伝えられ、地域の今日の生活の中に吸収されているのだろうか。本研究では、北東北の中核都市である岩手県二戸市を対象としてこの点に着目していく。

岩手県二戸市(旧南部藩)には、過酷な自然災害から生き延びる知恵を伝授するために著された『民間備荒録』(建部清庵、1796)や『飢饉考』(横川良助、江戸後期)および同書の元となった『救荒略』刊(佐々城朴安、1833)が伝わっている。例えば「救荒略、飢饉考、巻之七 食類」には「山には神から与えられた可なるものと非なるものがある」と論じ、その冒頭には土の食べ方、次節には安全な山菜の指摘と食べ方が細かく記述されている。これらはいわば「飢饉サバイバル・ガイドブック」である。今日でも山採りして食卓を賑わせる「山菜」は、このような指南書を通して広く普及した食の知恵であろう。これらが単に飢饉を生き残るための非常食マニュアルに過ぎないのであれば、常時は仕舞い込まれ、伝わることは稀有であったと思われるが、実際には日常の食生活の中で、楽しいもの、美味しいもの、家族が幸せになれるものとして伝えられるという「創造的な食文化の開発」が加わったのではないかと考える。山菜も、悲しさや貧しさと直結するのであれば、人々はそれを積極的に活用しただろうか。救荒食をベースに新しい食べ方の開発や、食材の改良が行われ、苦しい記憶に打ち勝つ楽しい食文化が産み出されてきたのではないだろうか。

## (2) 研究目的と手法

本研究では、以上の背景を問題意識として、自然災害を経験しながら地域に生きる知恵としての食文化がどの様に継承されているのか、またどの様に新しい食として活用し継承しているのかという「地域食文化の伝承」の姿を把握し、観光への展開の可能性を見出すことを最終目的とする。本研究ノートは、この研究のための調査手法の開発過程を整理したものである。なお救荒作物に着目

した先行研究として、溝田(2012)がある。溝田は救荒備荒録を題材に環境教育や防災協力への応用を提案しているが、本研究では観光とのかかわりを検討することからその目的は異なっている。

### (3)構成

本研究ノートは以下の3部より構成する。

第一部では、南部地方に伝わる救荒作物名が記されている古文書をもとに、植物リストの抽出と呼び名の抽出を試みた。合わせて記載されている古文書の背景と系譜について整理を試みた。

第二部では、古文書に記載されている救荒作物(第一部の成果)について標準和名を同定し、学名を追記し、二戸市周辺での分布の有無を確認した。

第三部では、地域で伝承されてきた救荒作物に対して、地域の人々の間で現在どの程度認識され、食文化に活用されているのかを判別するため、現地において地域住民を対象に植物名とその写真を提示し、その植物への認識の可否調査を行う救荒作物調査プログラムの作成を試みた。

本研究の構成を図示すると以下の通りである(図1)。

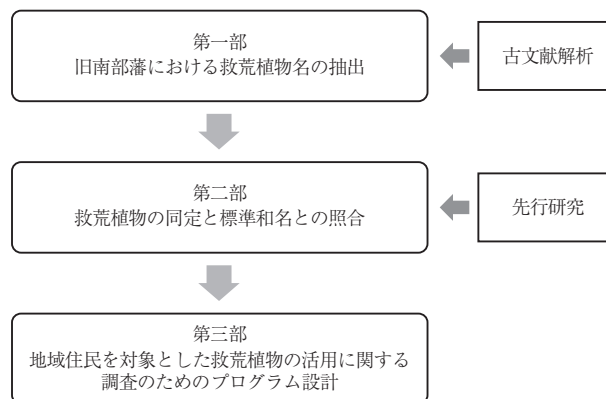


図1 本研究のフロー

### (4)用語の定義

一般社団法人日本雑穀協会では、雑穀は時代背景や主食の変化につれ、捉えられ方も変わってきており、日本雑穀協会では、これら農学的な狭義の雑穀の定義を尊重しつつ、雑穀と呼ぶ作物の対象範囲を拡げ「主食以外に日本人が利用している穀物の総称」としている。

雑穀の範囲は、本研究の岩手県二戸市で栽培されている雑穀を挙げるならば以下のようなものが含まれる。

- キビ、アワ、ヒエ、シコクビエなど、イネ科作物で小さい穎果をつける狭義の雑穀(millet)
- オオムギ、ライムギ、エンバク、ハトムギ、ソルガム(タカキビ、モロコシ、ホワイトソルガム)など、日本人が主食として利用していないイネ科作物
- 大豆や小豆などの豆類(菽穀)
- キノア、アマランサス、ソバなどの擬穀
- ゴマ、エゴマ、の種など、主に油脂を利用し、粒食もされる油穀とも称される作物

参考(<https://www.zakkoku.jp/aboutassociation>)

表 1 東北の震災史

年 西暦	元号	名称	震源	震度	被災規模等
830	天長 7	出羽天長大地震	出羽国	7-7.5	秋田城壊、百姓15人死亡、100人負傷
850	嘉祥 3	出羽嘉祥地震・津波	庄内地方	7	圧死者多数。国府倒壊。 「海水が国府から6里まで押し寄せた」
869	貞観11	多賀城地震	三陸沖	8.3	多賀城倒壊。死者1,000名以上。仙台平野、 名取平野全域が浸水。東日本大震災に匹敵 する規模と推定される。
1611	慶長16.10.28	慶長三陸地震津波	三陸沖	8.1	南部藩領で約3,000名、伊達藩領内で1,783 人の死者
1677	延宝 5.3.12	延宝八戸地震津波	八戸	7.25-7.5	家屋流潰約60戸
1694	元禄 7	能代地震	出羽地方	7	
1772	明和 9		陸前・陸中	6.75	地割れ・山崩れ・落石による人身被害
1793	寛政 5		陸前・陸中・磐城	8.3-8.4	大槌・両石・気仙沼・釜石に津波による被害。 流出家屋多数
1856	安政 5	安政の八戸沖地震	日高・胆振・津軽・南部	7.5	津波が三陸・北海道の南岸を襲う。 家屋流出・倒壊・溺死者
1896	明治29	明治三陸地震津波	岩手県沖	8.25	津波が北海道から牡鹿半島沿岸に襲来。 岩手県死者18,158名
		陸羽地震	秋田県東部	7.2	岩手・秋田県境で被害大。死者209名
1933	昭和 8	昭和三陸地震津波	三陸沖	8.1	太平洋岸に津波。三陸沿岸の被害甚大。 死者・行方不明者3,064名
1952	昭和27	十勝沖地震	釧路沖	8.2	津波波高北海道3m、三陸沿岸で1～2m。 死者28名
1960	昭和35	チリ地震津波	チリ沖	8.5-9.5	波高は三陸沿岸で5～6m、被害大。 死者・行方不明者142名
1968	昭和43	1968年十勝沖地震	三陸沖	7.9	三陸沿岸3～5mの津波。死者52名
1978	昭和53	1978年宮城県沖地震	宮城県沖	7.4	宮城県を中心に死者28名
2011	平成23	東北地方太平洋沖地震	三陸沖	9	犠牲者・行方不明者約22,700名

(宮古市教育委員会(1991)、高山(2011)、大矢(2011)などをもとに筆者作成)



表2 旧南部藩の飢饉史

年(西暦と元号)			原因	豊凶	減収	餓死者
元禄の飢饉(元禄7～15年)						
	1694	元禄7	霖雨	大凶作	2万～3万石減収	
	1695	元禄8	気候不順	大飢饉	10万石減収	4万人以上
	1696	元禄9	気候不順		2万俵減	
	1699	元禄12		大凶作、飢饉	6万6000俵減	
	1701	元禄14		凶作	4万9000俵減	餓死者多し
	1702	元禄15		大凶作、飢饉	8万俵減	2万5000人
	1703	元禄16		凶作		
宝暦の飢饉(宝暦5～12年)						
	1755	宝暦5	冷氣	大凶作、大飢饉	9万9000石減	6万1000人
	1756	宝暦6	天候不順	飢饉	9万9000石減	餓死逃亡10万余
	1757	宝暦7	霖雨	不作	4万6000石減	
	1762	宝暦12		凶作		
天明の飢饉(天明元～8年)						
	1772	安永1		凶作	7万7000石減収	
	1773	安永2		凶作	7万9000石減収	
	1774	安永3		凶作		
	1775	安永4		不作		
	1776	安永5		凶作	6万石減収	
	1777	安永6		凶作	6万1000石減収	
	1778	安永7		凶作	6万7000石減収	
	1779	安永8		凶作	5万2000石減収	
	1780	安永9		凶作		
	1781	天明1		飢饉		
	1782	天明2		不作		
	1783	天明3	東風、霖雨	大凶作、大飢饉	18万9000石減収	6万7000人余
	1784	天明4			不仕付のため9万3000石減収	
	1785	天明5	大風水害		17万7000石減収	
	1786	天明6	大風水害	飢饉	16万6000石減収	
	1787	天明7		凶作、飢饉	6万3000石減収	
	1788	天明8		凶作	4万2000石減収	
天保の飢饉(天保3～10年)						
	1832	天保3	気候不順			
	1833	天保4				
	1834	天保5				
	1835	天保6				
	1836	天保7				
	1837	天保8				
	1838	天保9				

(『二戸郡誌』をもとに作成)

## 1. 南部地方に伝わる救荒作物名が記されている古文獻をもとにした植物リストの作成(第一部)

### (1) 使用した文獻

本作業に使用した文獻は以下の通りである。①を基本文獻とし、②以下を参照文獻とした。各文獻の制作年代は表3の通りである。各文獻の概要は本論文の巻末に収録した。

- ① 横川良助著『飢饉考 卷之七(食類)』、岩手県立図書館編「岩手史叢」(第8巻)、岩手県文化財愛護協会発行、1984。(以下、飢饉考と略す)
- ② 佐々城朴安撰『救荒略』、国会図書館デジタルアーカイブ、1833(天保4)。(以下、救荒略と略す)
- ③ 周定王櫛編纂・松岡玄達校訂『救荒本草』和刻本および王西樓輯・姚可成補遺・松岡玄達校訂『救荒野譜』和刻本、『救荒Ⅰ』収載、(享保元年・1716刊)\*  
\*両書は合本として刊行されている。(以下、本草と略す)
- ④～⑧小野職博(蘭山)口授『救荒本草』・『救荒野譜』『救荒野譜補遺』および小野職孝(小野蘭山の子息)口授『救荒本草啓蒙』『救荒野譜啓蒙』(いずれも『救荒Ⅰ』収載)

### (2) 救荒植物の種の抽出

まず、『飢饉考 卷之七』所収の原文表記(中国名)と和名によるリストを作成した。これをベースとし、②～⑧の各文獻、さらに本草学者による同定などによって、必要に応じてクロスチェックを行い、リストを作成した。抽出した種数等は次の通りである。各文獻は以下のように活用した。

#### 1) ①『飢饉考 卷之七(食類)』

手順としては、基本文獻とした『飢饉考 卷之七』所収の『救荒略』抜粋部分をもとに、原文表記(中国名)と、カタカナのふりがなで表わし、また別名がある場合は、原文表記の下に記された和名の照合リストを作成した。件数は、草部141種、木部56種、計197種である。

#### 2) ②『救荒略』の参照

本書は『飢饉考 卷之七(食類)』の原本である。『救荒略』掲載種は203種である。国会図書館のデジタルアーカイブからダウンロードした版本によって、リスト①との照合を行った。『救荒略』の同定和名を追加、中国名について表記が異なる場合は加えた。『飢饉考 卷之七』に所収の当該部分について、著者横川良助による追加や削除の有無、また和名の同定の相違等について照合した。

その結果、植物の種類については、和名は『救荒略』がひらがな表記、『飢饉考 卷之七(食類)』はカタカナ表記という違いはあるが和名の相違はなかった。

また、以下の種が『飢饉考 卷之七』所収では脱落していた。草の部では、苦買菜(の○な)、邪蒿(だけにんじん)、莧菜(おとこ? ひやな)、木の部では、橡子樹(とち)、石岡橡(いしなら)、鵲不踏(たちえおうのき)の6項目である。いずれも、3項目が続いて表記されているが、脱落している理由は不明である。基本リストへの追加は行わなかった。

#### 3) ③『救荒本草』和刻本および『救荒野譜』和刻本の参照

『救荒本草』和刻本との照合を行った。本書には図が記載されているため、リスト上に同じ名称の種が掲載されている場合には、図を使用して同定できるメリットがある。『救荒本草』和刻本は、中国名にカタカナで和名を表記している。『飢饉考 卷之七』所収の項目を抜き書きし、リスト③を作成した。

その結果、『飢饉考 卷之七』および『救荒略』に掲載された種類のうち、次の種は『救荒本草』和刻本に含まれていなかった。

リスト①草部の猪殃々(ムクラ)、糸薺々(ネコハキ)、看麦娘(スヽメノタカラ)、眼子菜(ヒルモ)、碎米薺(タネツケハナ)、鶯観草(カミヂクサ)、萍蒼草(カクホネ)、地銭児(カキトラオシ)の8種、木部では、羊婆奶(ヤマグワ)、山黧樹(カンホク)、五加木(ウコギ)の3種である。

これらのなかで草部の8種、木部の山黧樹(カンホク)、五加木(ウコギ)は、『救荒野譜』和刻本に図とともに掲載されている。五加木(ウコギ)は、「五加」と表記されている。

羊婆奶(ヤマグワ)は、『飢饉考 卷之七』および『救荒略』以外の文献には見当たらなかった。

また『飢饉考 卷之七』において『救荒略』から脱落している6種について付け加えれば、『救荒本草』和刻本では、草の部の苦買菜(ヲニタビラコ、ケシアザミ)、邪蒿(和名なし)、莧菜(ヒユ)、木の部では、橡子樹(クヌキ)、石岡橡(和名なし)とあり、鵲不踏は『救荒野譜面』に「タラノキ」と同定されている。

#### 4)④小野職博(蘭山)口授『救荒本草』・『救荒野譜』『救荒野譜補遺』の参照

これらの文献から、『飢饉考 卷之七』掲載の種について、同定された和名を抜き書きし、リストに加えた。『飢饉考 卷之七』、『救荒略』と変わらぬもののほか、異なる名称などもみられ、植物種の同定にあたっての資料の一つとして作成した。

『救荒本草』和刻本から脱落していた山黧樹(カンホク)は、『救荒本草啓蒙』では、目録にはないが本文には記載されている。この種については、「ウリノキ或いは空骨消の説あり、図と相似しているが適当と言い難い」と同定できていない。

上記1)～4)の作業を行い、植物種の同定の基礎資料として、「飢饉考(食類)掲載種データ」(表4)を作成した。

表3 江戸時代の飢饉と救荒書

和暦(年)	西暦(年)	飢饉 (政治・社会・文化)	本草書・救荒書
(永楽4)	1406		明、周定王櫓(1360～1425)編著『救荒本草』(440種)初版序刊行
(嘉靖4)	1525		『救荒本草』重刻版。最古のものとして伝わる刊本
(万暦24年)	1596		明、李時珍(1518～1593)『本草綱目』(52巻800種)初刊
(万暦年間)			兪汝為『荒政要覧』(10巻)に、『救荒本草』抄録
慶長8年	1603	江戸幕府、開かれる。	
元和1～4年	1615～1618	元和の飢饉。奥羽、冷害のため大凶作となり、弘前藩では餓死者多数	
慶長9年	1604		『本草綱目』、日本に到来。江戸期を通じて23回の渡来を記録
寛永14年	1637	島原の乱起きる。	『本草綱目』和刻本刊行
(崇禎12年)	1639		明、徐光啓編纂『農政全書』(60巻)刊行。『救荒本草』(重刻版)のすべてが収録される(巻46～59)
寛永18～20年	1641～1643	寛永の飢饉。「天下大飢饉」飢饉への対応の原則がつくられた。	
延宝2～3年	1674～1675	全国的に風水害がたびたび襲い凶作となる。	
延宝8年	1680	風水害により諸国大凶作。西国では、翌年春にかけて餓死者多し。	
天和元～2年	1681～1682	天和の飢饉。奥羽、冷害のため大凶作。弘前藩では餓死者多数	
元禄8～9年	1695～1696	元禄の飢饉。冷害により奥羽・北陸大凶作。弘前藩、盛岡藩では翌年にかけて餓死者数万に及ぶ。盛岡藩、凶作を理由に参勤交代を免じられる。	
元禄10年	1697		宮崎安貞著『農業全書』(10巻)刊行。貝原益軒序
元禄15年	1702	冷害により、奥羽大凶作。盛岡藩、餓死者多数	
元禄16年	1703	元禄地震	
宝永1年	1704	浅間山噴火	
宝永4年	1707	10月、宝永地震。11月、富士山の噴火	
宝永5年	1708		貝原益軒『大和本草』刊行
享保元年	1716	吉宗将軍となる(8代)。享保の改革(享保1年～延享2年)始まる。	松岡玄達による合刻本『救荒本草』『救荒野譜』刊行
享保17～18年	1732～1733	享保の飢饉。西日本で最大の飢饉。冷害や長雨などの天候不順と蝗(ウンカ)害による。	
享保20年	1735		青木昆陽著『甘藷考』成立
延享4年	1747		丹羽正伯著『庶物類纂補』54巻完成
寛延2～3年	1749～1750	寛延の飢饉。冷害、獣害により北奥を中心に大凶作。八戸藩の猪飢饉(いのししがち)と呼ばれる。	
宝暦5～6年	1755～1756	宝暦の飢饉。冷害により、東北地方を中心に大凶作。盛岡藩、翌年にかけて餓死者多数。東北地方を中心に大飢饉	宝暦5年、一関藩に仕える医師・建部清庵、『民間備荒録』を脱稿 ○『飢饉考』巻1：宝暦3年～5年(小権薫卿著)

和暦(年)	西暦(年)	飢饉 (政治・社会・文化)	本草書・救荒書
宝暦10年	1760		建部清庵著『民間備荒録』刊行、明和8年版、天保4・6年版
明和8年	1771		建部清庵著『備荒草木図』刊行、天保4年版
安永3年	1774		『飢饉考』著者・横川良助(1774～1857)生れる。
安永8年	1779	安永の桜島大噴火	○『飢饉考』巻3：安永9年～天保4年
天明3年	1783	7月、浅間山大噴火、天明の浅間焼け。降灰の被害甚大	
天明3～4年	1783～1784	天明の飢饉。江戸時代、最も悲惨な飢饉。津軽地方、東北地方の太平洋側を中心に冷害による大凶作。東北地方で30万人の餓死・疫病死者がでる。一揆や米騒動が全国的に多発したことが特徴	
天明7～寛政5年	1787～1793	老中松平定信による寛政の改革	
天明7年	1787		上原無休著『五穀無尽蔵』刊行(○『飢饉考』巻2に収録)。寛政4年版、天保4年版
寛政11年	1799		小野蘭山『[校正]救荒本草、救荒野譜補遺』の和刻に携わる。
享和2年	1802	諸国洪水・江戸大洪水	中条至資著『かてもの』刊行
享和3年	1803		小野蘭山『本草綱目啓蒙』48巻刊行
文化8年	1811		鈴木武助著『農論』刊行(文化2年成立)○(『飢饉考』巻3に収録)。文政8年版、天保2年版
文政9年	1826		遊佐東庵著『救荒略説』刊(○『飢饉考』巻7に収録)
天保4～10年	1833～1839	天保の飢饉。天保4年に、冷害・洪水により大凶作となり、翌年にかけて東北地方、出羽地方で餓死者多数。以後、天保10年にかけて小作が続く。寛永の飢饉でつくられた幕府の飢饉対応策が機能しなくなった。	○『飢饉考』巻4：天保4年～7年 ○『飢饉考』巻5：天保7年～嘉永7年
天保4年	1833		佐々城朴安著『救荒略』刊行(○『飢饉考』巻3に収録)
天保14年	1843		小野職孝著『救荒本草啓蒙・救荒野譜啓蒙』刊行
天保1～14年	1830～1843	老中水野忠邦、天保の改革	
嘉永7年	1854	安政東海地震・安政南海地震	○『飢饉考』巻9：嘉永7年～安政4年
安政2年	1855	安政の江戸地震	
安政4年	1857		12月、横川良助没、『飢饉考』最後の記述は安政4年9月2日
慶応2年	1866	冷害・風水害により凶作となる。幕府、外国米の輸入・販売を許可する。	
慶応3年	1867	大政奉還	

資料：飢饉については、菊池1997, pp.4-10, 年表, pp.257-260. 本草書・救荒書については、白杉1995, 年表, pp.167-172等

表 4 飢饉考(食類)掲載種データ  
1. 草本(抜粋) 飢饉の節、食料にあうる草木 根葉に食すべし

①飢饉考		②救荒略		③救荒本草(和刻本)			④救荒野譜		⑤救荒本草 (小野蘭山口授)		⑥救荒野譜面 (小野蘭山口授)		⑦救荒本草啓蒙		⑧救荒野譜啓蒙	
表記	同定和名	表記 (異なるもの)	同定和名	巻	表記 (異なるもの)	同定和名	表記 (異なるもの)	同定和名	表記 (異なるもの)	同定和名	表記 (異なるもの)	同定和名	表記 (異なるもの)	同定和名	表記 (異なるもの)	同定和名
野生姜	キンクハ		きんくは	草部 巻之一		セヨウナリナド				アキノキノリナ の一種				アキノキノリナ (本文中)		
刺藺菜	ノアサミ		のあさみ	草部 巻之一		サハアザミ				ノアザミ				ノアザミ		
大薊	オオアサミ		おおあさみ	草部 巻之一		ヤマアザミ				ヤマアサミ				ヤマアザミ		
山苧菜	コマノヒサ		こまのひざ	草部 巻之一		イノコブチ				イノコツナ				イノコブチ		
蕭薺	ニハヤナキ		にこやなき	草部 巻之一		ニハヤナギ				ニハヤナキ				ニハヤナギ		
	ミチシハ		みぢしは			――				ホ、キモトキ				ウシクサ (和名 藜蘆に決)		
														マキクサ		
														ニハタサ		
石竹子	ナテシコ		なでしこ	草部 巻之一		ナデシコ				ナデシコ				ナデシコ		
紅葉菜	コウハナクハ		こうくは○な	草部 巻之一		ベニノハナ			紅葉菜	クレナイベニ			紅葉菜 即ち紅藍花	クレナイ		
萱草	クワンソウ	萱艸	くわんさう	草部 巻之一		ワスレグサ				ワスレクサ				ワスレグサ		
						クハシヅウ								シノブグサ		
														クワシヤオウ		
泉薺苗	ケタテ		けたて	草部 巻之一		――			白水薺苗	ハブテコブ			白水薺苗 即ち紅草苗	オホケタテ		
						ヲホケタテ				ホタルタテ				イヌタテ		
										大ケタテ						
威霊仙人	トラノヲ		とらのを	草部 巻之一		クガイサウ				リカイ草				クガイサウ		
	タカノイソウ		くえさう			――				トラノヲ				トラノヲ		
										クルマミヒ						



① 類植考		② 収荒略		③ 収荒本草(和刻本)			④ 収荒野譜		⑤ 収荒本草 (小野蘭山口授)		⑥ 収荒野譜面 (小野蘭山口授)		⑦ 収荒本草啓蒙		⑧ 収荒野譜啓蒙	
表記	同定和名	表記 (異なるもの)	同定和名	巻	表記 (異なるもの)	同定和名	表記 (異なるもの)	同定和名	表記 (異なるもの)	同定和名	表記 (異なるもの)	同定和名	表記 (異なるもの)	同定和名	表記 (異なるもの)	同定和名
馬兜鈴	ムマノス、		むまのすず	草部 卷之一		ムマノスズ				ムマノスズ				ムマノスズ (本文中)		
														ジャカウサウ		
														ツンボグサ (播州)		
旋覆花	ヲクルマ		おくるま	草部 卷之一		ヲグルマ				ヲグルマ				ヲグルマ		
														ノグルマ		
蛇床子	ハニニンチン			草部 卷之一		ヤブシラミ				ハマニンジン				ハマニンジン		
										ヤブシラミ (誤り)				ハマセリ		
桔梗	キ、ヤウ		ききやう	草部 卷之二		キキョウ				キナカウ				アリノヒフキ (和名鈔)		
										キ、ヨウ				ヲカト、キ (古歌)		
														ヒトエグサ (同上)		
														佛吉草 (和方書)		
														今ハ通名		
夏枯草	カコソウ		うもちこ	草部 卷之一		ーふりがなしー				十二ヒトエ				ウルキ (和名鈔)		
			うづほくさ			——								ジウニヒトエ		
														ウツボグサ		
前胡	タニセフ		たにぜり	草部 卷之一		ノダケ				ノダケ				ノダケ		
														ミツバグサ (延喜式)		

①創鑑考		②救荒略		③救荒本草(和刻本)			④救荒野譜		⑤救荒本草 (小野蘭山口授)		⑥救荒野譜面 (小野蘭山口授)		⑦救荒本草啓蒙		⑧救荒野譜啓蒙	
表記	同定和名	表記 (異なるもの)	同定和名	巻	表記 (異なるもの)	同定和名	表記 (異なるもの)	同定和名	表記 (異なるもの)	同定和名	表記 (異なるもの)	同定和名	表記 (異なるもの)	同定和名	表記 (異なるもの)	同定和名
地榆	ヂユ			草部 卷之一		――				フレモカウ				アヤメタム (和名鈔)		
	フレモコウ		われもこう			フレモカフ								エビスグサ (同上)		
	タゴハナ		だんごらな			――								フレモコウ (同名多し)		
														*ナナヤクサ (類種、東北)		
葛勒子草	ヤハムクラ	葛勒子菜	やみむぐら	草部 卷之一	葛勒子	ヤエムダラ				カナムグラ				カナムグラ		
馬蘭頭	コンキク		こんぎく	草部 卷之二		コンキク	馬欄頭	コンキク		コンキリ		コンキク		コンキク		コンキク
	ヨメナノ類		よめなの類			――	馬蘭	コンキク								コンキク
稀薺	メナモミ		めなもみ	草部 卷之二		メナモミ	草冠に布薺	メナモミ		メナモミ		メナモミ		メナモミ		メナモミ
														モチナモミ (古方書)		
竹節菜	フユクサ		つゆくさ	草部 卷之二		アラバナ				アラバナ				ツユクサ		
														アオバナ		
														モ、ヨグサ		
														ハナダクサ		
														ツミクサ (以上、古歌)		
														ツヤクサ (和名鈔)		
歪頭菜	フタハウキ		ふさむうき	草部 卷之二		タニワタシ				タニワタリ				タニワタシ		
														タニハギ		
兔兒酸	サクラタデ		さぐらたで	草部 卷之二		イスタデ			*和産知れず	*イスタデ とも見えず				未詳		
鹹蓬	マツナ		まづな	草部 卷之二		ーふりがなしー				マツナ				マツナ		
														ハマ、ツナ		

①植考		②敗荒略		③敗荒本草(和刻本)			④敗荒野譜		⑤敗荒本草 (小野蘭山口授)		⑥敗荒野譜面 (小野蘭山口授)		⑦敗荒本草啓蒙		⑧敗荒野譜啓蒙	
表記	同定和名	表記 (異なるもの)	同定和名	巻	表記 (異なるもの)	同定和名	表記 (異なるもの)	同定和名	表記 (異なるもの)	同定和名	表記 (異なるもの)	同定和名	表記 (異なるもの)	同定和名	表記 (異なるもの)	同定和名
藺蒿	シトケ		しどけ	草部 卷之二		一ふりがなしー			*草冠に奄蘭 イヌヨモギ草冠にメの類、 葉は菊に似たり				イヌヨモギ			
水蒿萱	カワチサ		うわち?	草部 卷之二		カハチサ			カハチサ				カハチサ			
									キハヤシレイ草							
水練菜	トヨキ		とよぎ	草部 卷之二		一ふりがなしー			水練				オトコヨモギ			
													カラヨモギ (江州)			
鴉葱	シライト		しらいと	草部 卷之二		一ふりがなしー			シライトウ				シライト			
匙頭菜	フテクサ		ふ・・・	草部 卷之二		一ふりがなしー			ミヤスマシレ				サジクサ			
雞冠菜	メケイトウ		のけいとう	草部 卷之二		一ふりがなしー			ノケイトウ				ノケイトウ			
													アマサク (和名鈔)			
牛尾菜	シヲテ		しをて	草部 卷之二		シホテ							シヲテ			
金剛刺	サルトリハチ		さるどり	草部 卷之四		一ふりがなしー			サルトリハテカ				サルトリハチ			
									キイハラ				カキイハラ			
									イヒツイハラ							
綿〇菜	カワラハコ		かわら・・・	草部 卷之二		一ふりがなしー			タビラコ				カワラケナ			
									カワラケナ				タビラコ			
山芥菜	イヌカラシ		いぬからし	草部 卷之二		一ふりがなしー			イヌカラシ				イヌガラシ			
													ノガラシ			
六月菊	ナツヨメナ	六月菊	なつよめな	草部 卷之二	六月菊	一ふりがなしー			ノジュンギク	六月菊			ノジュンギク	六月菊		
													シンギク (略して)			
金盞花	キンセンクハ		きんせんくわ	草部 卷之二		キンセンノハ?	金盞児	キンセンクハ	キンセンクワ		キンセン花		キンセン花	金盞児	キンセンクハ	トコナツハナ

表 4 飢饉考(食類)掲載種データ

2. 木本(抜粋) 葉実皮トモニ食スヘシ

①飢饉考		②救荒略		③救荒本草(和刻本)			④救荒野譜		⑤救荒本草 (小野蘭山口授)		⑥救荒野譜面 (小野蘭山口授)		⑦救荒本草啓蒙		⑧救荒野譜啓蒙	
表記	同定和名	表記 (異なるもの)	同定和名	巻	表記 (異なるもの)	同定和名	表記 (異なるもの)	同定和名	表記 (異なるもの)	同定和名	表記 (異なるもの)	同定和名	表記 (異なるもの)	同定和名	表記 (異なるもの)	同定和名
兜糧樹	カワクルミ		かわくるみ	木部 巻之九	一ふりがななし					未詳				ノグルミ		
白辛樹	トリネコ		とねりこ	木部 巻之九	一ふりがななし					和産未詳				ノシノキ (筑前)		
臭竹樹	クサギ		くさぎ	木部 巻之十二	一ふりがななし					サイカチの木				未詳		
老樹児樹	ウシコロシ		うしころし	木部 巻之九	老葉児樹	一ふりがななし			老葉児樹	未詳			老葉児樹	夏ユキとよぶ ものに近し		
夜合樹	ネムタ、		ねむ〇	木部 巻之九	子ムノキ				ネムの木					カウカ (万葉集、古今集)		
														子ブ(同上)		
														カウカノ木		
														子フリノ木 (和名鈔)		
木槿樹	キハチス		きはちす	木部 巻之九		ムクゲ	木槿葉	ムクゲノハ		ムクゲ		ムクゲ		ハチス	樺樹葉	ハチス
														アサガホ (万葉集)		ムクゲ (京師)
														ユフカゲツサ (古歌)		アサガホ (万葉集)
														ムクゲ(京)		
黄棟樹	ニカギ		にがき	木部 巻之九	一ふりがななし				未詳					ニガキ		
凍青樹	ヤマツバキ		やまつばき	木部 巻之九	一ふりがななし				*女貞のこ となり					子ズミモチノキ (和名鈔)		
									子ズミモチ					子ズミモチノキ (古歌)		
														子ズミモチノキ (京)		

① 創植考		② 収荒略		③ 収荒本草(和刻本)			④ 収荒野譜		⑤ 収荒本草 (小野蘭山口校)		⑥ 収荒野譜面 (小野蘭山口校)		⑦ 収荒本草啓蒙		⑧ 収荒野譜啓蒙	
表記	同定和名	表記 (異なるもの)	同定和名	巻	表記 (異なるもの)	同定和名	表記 (異なるもの)	同定和名	表記 (異なるもの)	同定和名	表記 (異なるもの)	同定和名	表記 (異なるもの)	同定和名	表記 (異なるもの)	同定和名
青楊樹	ヤマヤナギ		やまやなぎ	木部 卷之九		一ふりがなし				マルバヤナギ				*同名あり		
														水楊		
														白楊、ともに 青楊の名あり、 よって別なり		
荏苒油	ミツハウツギ		みつはうつぎ	木部 卷之九	省沽油 又の名、荏苒花	一ふりがなし				ミツハウツギ				ミツハウツギ		
回々蘭	カズノキ		かづのき	木部 卷之九		一ふりがなし				未詳				未詳		
										*按ずるに スルデの木						
木蘭に疎樹芽	モミチ		もみち	木部 卷之九		一ふりがなし				未詳				モミヂ		
										*モミチに 近いもの				カ井デ		
竜柏芽	カシノキノモヘ		かしのみ	木部 卷之九		一ふりがなし				未詳				未詳		
青岡樹	ナラノキ		ならのき	木部 卷之九		ナラ クスギ				クニギ				オクスギ		
山茶科	ハタツムリ		はぎ?つむり	木部 卷之九		一ふりがなし				レグハツムリ (古名)	山茶	ツバキ	山茶科	レウブ	山茶	ツバキ
														ハタツモリ (古歌)		
														ハタツマリ (同上)		
花椒樹	ナ、カマト		な、かまと	木部 卷之九		一ふりがなし				和産未詳				ナ、カマド		
木槲樹	センクンバ		せんくんば	木部 卷之九		——				センダン				センダン		
	ボダイジュ		ぼだいじゅ			ボダイジュ								葉菩提樹		
刺楸樹	セノキ		せのき	木部 卷之九		一ふりがなし				ハリキリ				ハリギリ		
										カツタイキリ				カツタイギリ		
										ホウタラ				ホウダラ		
										イヌキリ				イヌギリ		
														セノギ(慶州)		

①創植考		②救荒略		③救荒本草(和刻本)		④救荒野譜		⑤救荒本草 (小野蘭山口授)		⑥救荒野譜面 (小野蘭山口授)		⑦救荒本草啓蒙		⑧救荒野譜啓蒙	
表記	同定和名	表記 (異なるもの)	同定和名	巻	表記 (異なるもの)	同定和名	表記 (異なるもの)	表記 (異なるもの)	同定和名	表記 (異なるもの)	同定和名	表記 (異なるもの)	同定和名	表記 (異なるもの)	同定和名
黄糸藤 婆々枕頭	マンサク		まんさく	木部 巻之九		一ふりがななし		未詳				未詳			
	カダズミ		かだすみ	木部 巻之十		一ふりがななし		未詳				ヘミノキ ヤマテマリ			
報馬樹	ハゼノキ		はぜのき	木部 巻之九		一ふりがななし		*京に云う ハゼケルシ に近し				ハジモミヂ			
	ソバミ		そびみ	木部 巻之十		一ふりがななし		*喬木部 英蓬なり				ガマスミ			
孩児拳頭															
		橡子樹	とち									ズミ(紀州)			
		石岡橡	いしなら									ムシカリ (尾州)			
		鵲不踏	たらはうのき?									カマトウシ (藤州)			
無花果	イチバク		いちじく	木部 巻之十		イチジク						イチジク			
	タマヤナキ		くまやなぎ	木部 巻之十		一ふりがななし		未詳				トウガキ			
駱駝布袋	ナハリノクミ		なはしろくみ	木部 巻之十		一ふりがななし						*図の形、 クマヤナギ に近し			
												ウグイスビノキ (大和本草)			
拐藁	ケンホナシ		けんぼなし	木部 巻之十		ケンホナシ						ハシロイチコ (江〇)			
												ケンホナシ			
野木瓜	イグシ		いぐし	木部 巻之十		一ふりがななし						ケンホノナシ			
												ムベ			
												トキハアケビ			
												マルアケビ (紀州熊野)			
ムヘ															
			むへ			――									



① 創植考		② 救荒略		③ 救荒本草(和刻本)			④ 救荒野譜		⑤ 救荒本草 (小野蘭山口授)		⑥ 救荒野譜面 (小野蘭山口授)		⑦ 救荒本草啓蒙		⑧ 救荒野譜啓蒙	
表記	同定和名	表記 (異なるもの)	同定和名	巻	表記 (異なるもの)	同定和名	表記 (異なるもの)	同定和名	表記 (異なるもの)	同定和名	表記 (異なるもの)	同定和名	表記 (異なるもの)	同定和名	表記 (異なるもの)	同定和名
土薬樹	コマシチヤナギ		こましをやなぎ	木部 巻之十		ーふりがなしー				ゴマシタノキ				ゴマキ		
										コマキ				ランコウボク (花戸)		
皂莢樹	サイカチ		さいかち	木部 巻之十一		サイカチ				ランコウ木				サイカシ		
羊婆奶	ヤマグワ		やまぐは											サイカチ		
楮桃樹	カウズ		かうず	木部 巻之十一		カウズ				カウソ				カウソ		
						カヂノキ				カヂノキ				コゾノキ		

## 2. 古文書に記載されている救荒作物と現代の標準和名、学名との同定および二戸市周辺における分布有無の確認(第二部)

作業1から得られた表3について、図版や形態の説明等を参考に植物種の現代標準和名との同定を行い、その結果をデータベースとして作成した。手順は次の通りである。

### (1) 植物種の和名同定作業

表「飢饉考(食類)掲載種データ」(表3)について、図説書である『救荒本草』和刻本(文献③)をはじめとする上記文献、さらに辞典・事典類、文献、インターネット等を参照しつつ植物の種類を同定し、同時に「同定根拠」となるデータを作成した。同定した植物種は、194種である(図2)。

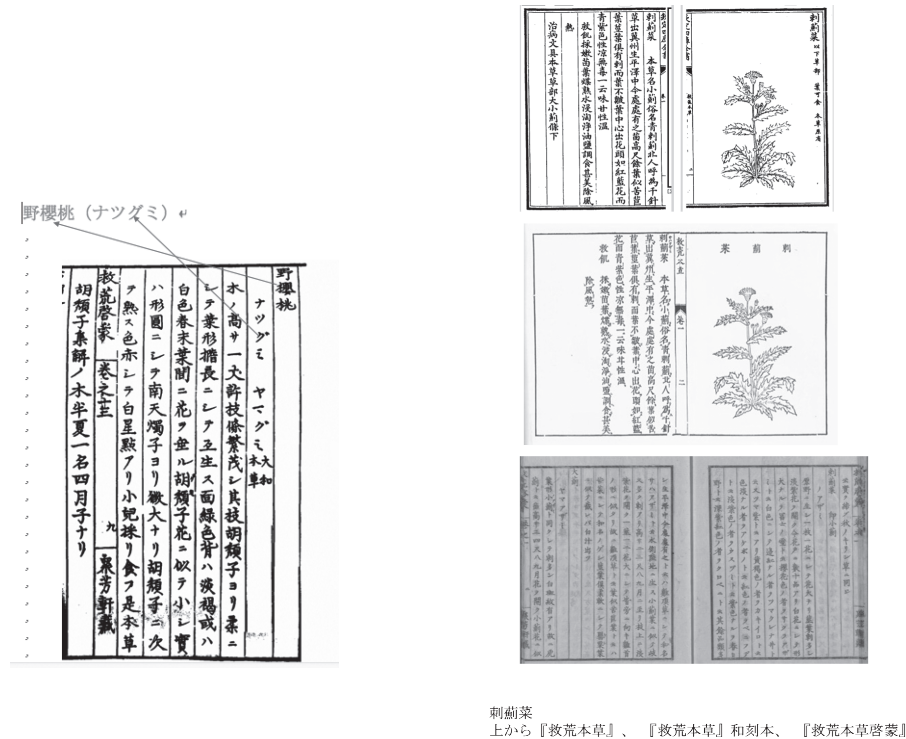


図2 中国語表記と和名表記の照合例

図3 図と植物名の照合

『飢饉考 卷之七(食類)』掲載の197種のうち、確定し得なかった2種、金剛刺(サルトリハチ)、花蒿(カワラハウコ)は割愛し、刺薊菜(ノアサミ)と大薊(オオアサミ)は、一つの種とした。その結果、3種が減少し、194種となった。調査結果の表示は、以下の項目の順に記述し、草本の部、木本の部として表5「救荒植物リスト」にまとめた。

- |       |      |       |              |        |       |
|-------|------|-------|--------------|--------|-------|
| 1：中国名 | 2：科名 | 3：和名  | 4：別名         | 5：食用部位 | 6：食べ方 |
| 7：類似種 | 8：備考 | 9：注意点 | 10：中国名同定根拠資料 |        |       |

表5 救荒植物リスト(抜粋)

表記	中国名	科名	和名	別名	食用部位	食べ方	似た仲間	備考、注意点
草の部								
野生姜	(不明)							
刺薊菜 } 大薊 }	薊	キク科	アザミ  (アザミ属の 総称)		根(牛蒡 の代用)  若い茎		ノアザミ、サワ アザミ、ナンブ アザミ、モリア ザミ、オニアザ ミ等	アザミ類(通常 葉に刺がある) はどれも食用
山萵菜	皺果萵(緑萵)	ヒユ科	ホナガイヌビユ	アオビユ	若い葉、 種子		イヌビユ	アオビユは明治 以降の帰化。イ ヌビユのことか。
蔊蓄 (へんちく)	蔊蓄	タデ科	ミチヤナギ	ニワヤナギ	若い葉、 茎		アキノミチヤナギ、 タチミチヤナギ	中国では普通に 食べられている らしい。
石竹子	石竹	ナデシコ科	セキチク	カラナデシコ	若苗			
紅花菜	紅花	キク科	ベニバナ	スエツムハナ	花びら	乱花…茹でて 乾燥、保存	アメリカ産の ベニバナ	
萱草	萱草、金針菜	ユリ科	ヤブカンゾウ	ワスレグサ	新芽、蕾		ノカンゾウ、 ニッコウキスゲ	
白水菰苗	紅蓼	タデ科	オオケタデ	オオベニタデ	若芽や 若葉			中国原産
威靈仙人 馬兜鈴	斬竜剣 馬兜鈴	ゴマノハグサ科 ウマノスズクサ科	クガイソウ ウマノスズクサ		新芽 ー		オオバウマノ スズクサ	正しくは威靈仙  ジャコウアゲハの 食草だが、有毒。 何かの違い。
旋覆花	旋覆花	キク科	オグルマ		頭花		カセンソウ、 オゼミズギク	
蛇床子	蛇床	セリ科	オカゼリ	ジャショウシ			ヤブジラミ	オカゼリは中国 原産。ヤブジラ ミは代用
桔梗	桔梗	キキョウ科	キキョウ		根	アクが強い のでアク抜きが 必要		
夏枯草	夏枯草	シソ科	ウツボグサ		若苗、葉、 花、花穂		ジュウニヒトエ	
前胡	前胡	セリ科	ノダケ					
地榆	地榆	バラ科	ワレモコウ		若葉	ゆでて水に とり、苦味を とってから油 炒めになると 美味		
葛勒子菜	蓴草	クワ科	カナムグラ					
馬蘭頭	馬蘭  (コヨメナは中 国では食用とさ れるが東北地方 には分布しない。 カントウヨメナ、 ノコンギクなど と混同している と思われる)	キク科	コヨメナ	インドヨメナ	若苗	軽く茹でて和 え物や炒め物	カントウヨメナ、 ノコンギク	
稀薺	毛薺薺 (腺梗稀薺)	キク科	メナモミ		全草		コメナモミ、 ツクシメナモミ	薬草として利用 (動脈硬化、脳 溢血等の予防)

災害復興の国際学へのアプローチ－救荒作物の地域食文化への伝承に関する研究手法の確立－

表記	中国名	科名	和名	別名	食用部位	食べ方	似た仲間	備考、注意点
竹節菜	鴨跖草	ツユクサ科	ツユクサ	ツキクサ、 ボウシバナ	開花前の 全草	癖がないので 普通の野菜と 同様に食する	オオボウシバナ	
歪頭菜	歪頭菜	マメ科	ナンテンハギ	フタバハギ、 アズキナ	若苗と 花蕾	茹でてお浸し、 胡麻和え、卵 とじなどで食 する	ミヤマタニワタシ	
兎兒酸	費菜	ベンケイソウ科	キリンソウ		若 葉、 若芽	塩ゆで。全草を 茹でて日干しに して保存食	ホソバノキリンソウ	
鹹蓬	(ハママツナは 宮城県以西の分 布。オカヒジキ も似ている。食 用部位、食べ方 はオカヒジキを 参考とした)	アカザ科	ハママツナ	シマハママツナ	若苗	塩茹で後、サラ ダ、和え物、刺 身のつまなど	オカヒジキ	
藺蒿	翠雀蟹甲草	キク科	モミジガサ	シドケ、 キノシタ	若苗、 花蕾	天ぶら、お浸 し、胡麻和え など	ヤブレガサ	ポピュラーな山菜
水蒿苳	水苦買、水蒿苳	ゴマノハグサ科	カワヂシャ	カワヂサ、 カワジサ			オオカワヂシャ	カワヂシャは絶 滅危惧。オオは 特定外来生物で 栽培禁止
水辣菜	禺毛苳	キンポウゲ科	ケキツネノボタン					毒草
鴉葱	(なし)	ユリ科	シライトソウ					
匙頭菜	(なし)	スマレ科	フモトスマレ		若苗		スマレはいずれ も食用になる	絵から、スマレ サイシンも候補？
雞冠菜	雞冠花	ヒユ科	ケイトウ		葉	癖がないので お浸し、和え 物、天ぶらな ど	園芸品種がい ろいろある	奈良時代に中国 から渡来。救荒 植物として栽培 された。
牛尾菜	牛尾菜(草拔葵)	ユリ科	シオデ		若い茎	アスバラガス と同じように 食べる	タチシオデ	山菜として有名。 タチシオデと区 別しなくてよい。
綿絲菜	矮桃	サクラソウ科	オカトラノオ		若葉、 若芽	お浸し、 卵焼き、 天ぶら	ヌマトラノオ	サバイバル節約 術サイト
山芥菜	山芥	アブラナ科	ヤマガラシ	マルバヤマガラシ	若芽、 若茎	おひたし、 あえ物	ハルザキヤマガラシ	ハルザキは明治 末年に渡来
六月菊	茼蒿	キク科	シュンギク	キクナ	全草	お浸し、 なべ物		地中海沿岸原産
金盞兒花	金盞菊	キク科	ホンキンセンカ	キンセンカ	花びら	天ぶら	トウキンセンカ	原産地南欧。江 戸時代に中国を 経て渡来
費菜	費菜	ベンケイソウ科	キリンソウ					前出(兎兒酸)
千屈菜	(なし)	ミソハギ科	ミソハギ		若苗	アク抜き後調 理。あえもの、 炒め物、佃煮	エゾミソハギ	日本、朝鮮半島 に分布

## (2) 二戸市周辺における分布確認作業

上記の同定結果をもとに、以下の確認作業を行った。

第一次作業で使用した『救荒略』(①)は、仙台藩医であった佐々城朴安が執筆しており、「奥州にて得やすく」と注記されているため、現在の仙台周辺で野生あるいはよく栽培されている植物が掲載されているものと考えられる。しかし、本研究は、調査対象地域を旧南部藩である岩手県二戸市の一集落を想定していることから、二戸市周辺にも分布する植物種を絞り込むことが望ましい。そこで、『北東北維管束植物分布図』などを用いて二戸周辺での分布を調べ、飢饉食料調査用の植物リストを完成させた。同定に際しては、備荒草木図の図は特徴を正確に捉えているので、正確な同定資料として利用した。

## (3) 学名追記作業

植物生態学の専門家の協力により、上記についての仙台周辺における分布の確認を行い、種の標準和名が確定した種については学名を対応させた。

上記(2)、(3)の作業によりまとめたものが表6「二戸地方に分布する救荒植物リストおよび学名」である。

表6 二戸地方に分布する救荒植物リストおよび学名(確定)

飢饉食糧植物								推定根拠	分布状況	
表記	かな解説	推定和名	別名	YList学名	科				二戸	栽培
					科名	学名	APG			
野生姜	きんくは	アキノキリンソウ		Solidago virgaurea L subsp. asiatica (Nakai ex H.Hara) Kitam. ex H.Hara	キク科	Asteraceae	3403	かな解説による植物名の別名	1	
刺薊菜	のあざみ	ノアザミ		Cirsium japonicum Fisch. ex DC.	キク科	Asteraceae	3403	かな解説による。	1	
大薊	おふあざみ	ナンブアザミ		Cirsium makinoi Kadota	キク科	Asteraceae	3403	宮城県に最も普通なアザミ属	1	
大薊	おふあざみ	ノハラアザミ		Cirsium oligophyllum (Franch. et Sav.) Matsum.	キク科	Asteraceae	3403	宮城県に最も普通なアザミ属	1	
山苧菜	こまのひざ	イノコヅチ	アオビユ	Achyranthes bidentata Blume var. japonica Miq.	ヒユ科	Amaranthaceae	3297	かな解説による植物名の別名(ネット情報)	1	
山苧菜	こまのひざ	ヒナタイノコヅチ	アオビユ	Achyranthes bidentata Blume var. fauriei (H.Lév. et Vaniot)	ヒユ科	Amaranthaceae	3297	かな解説による植物名の別名(ネット情報)	1	
山苧菜	こまのひざ	オキナグサ	アオビユ	Pulsatilla cernua (Thunb.) Berchtold et J.Presl	キンボウゲ科	Ranunculaceae	3111	かな解説による植物名の方言(宮城県植物誌)	1	
蔦薺	にわやなぎ、みぢしば	ミチヤナギ	ニワヤナギ	Polygonum aviculare L. subsp. Aviculare	タデ科	Polygonaceae	3283	中国名(YList)、およびかな解説による植物名(にわやなぎ)の別名(YList)による。「みぢしば」は宮城県の方言(宮城県植物誌)	1	
石竹子	なでしこ	カワラナデシコ	カラナデシコ	Dianthus superbus L. var. longicalycinus (Maxim.) F. N. Williams	ナデシコ科	Caryophyllaceae	3295	かな解説による植物名の別名(YList)	1	
紅花菜	こうくははな	不明	スエツムハナ							
萱草	くわんさう	ゼンテイカ	ワスレグサ	Hemerocallis dumortieri C. Morren var. esculenta (Koidz.) Kitam. ex M. Matsuoka et M.Hotta	ススキノキ科	Xanthorrhoeaceae	3073	かな解説および中国名(YList)による。	1	

災害復興の国際学へのアプローチ－救荒作物の地域食文化への伝承に関する研究手法の確立－

飢饉食糧植物								推定根拠	分布状況	
表記	かな解読	推定和名	別名	YList 学名	科				二戸	栽培
					科名	学名	APG			
萱草	くわんさう	ノカンゾウ	ワスレグサ	Hemerocallis fulva L. var. disticha (Donn ex Ker Gawl.) M.Hotta	ススキノキ科	Xanthorrhoeaceae	3073	かな解読および中国名(YList)による。	1	
萱草	くわんさう	ヤブカンゾウ	ワスレグサ	Hemerocallis fulva L. var. kwanso Regel	ススキノキ科	Xanthorrhoeaceae	3073	かな解読および中国名(YList)による。	1	
白水菰苗	けたで	オオケタデ	オオベニタデ	Persicaria orientalis (L.) Spach	タデ科	Polygonaceae	3283	宮城県に生育し、毛の目立つイヌタデ属	1	
威霊仙人	くかいさう、とらのを	クガイソウ		Veronicastrum japonicum (Nakai) T. Yamaz. var. japonicum	オオバコ科	Plantaginaceae	3370	かな解読による。	1	
馬兜鈴	むまのすゝ	ウマノスズクサ		Aristolochia debilis Siebold et Zucc.	ウマノスズクサ科	Aristolochiaceae	3012	中国名による(YList)	1	
旋覆花	おくるま	オグルマ		Inula britannica L. subsp. japonica (Thunb.) Kitam.	キク科	Asteraceae	3403	中国名による(YList)	1	
蛇床子	はまにんじん	ハマゼリ	ジャシヨウシ	Cnidium japonicum Miq.	セリ科	Apiaceae	3416	かな解読から海岸生のセリ科と思われる。中国名はオカゼリを指す(YList)。宮城県に自生するのは同属のハマゼリ	1	
桔梗	ききやう	キキョウ		Platycodon grandiflorus (Jacq.) A. DC.	キキョウ科	Campanulaceae	3394	かな解読および中国名(YList)による。	1	
夏枯草	うばちこ、うづぼくさ	ウツボグサ		Prunella vulgaris L. subsp. asiatica (Nakai) H. Hara	シソ科	Lamiaceae	3383	かな解読および中国名(YList)による。「うばちこ」は宮城県の方言(宮城県植物誌)	1	
前胡	たにせり	ノダケ		Angelica decursiva (Miq.) Franch. et Sav.	セリ科	Apiaceae	3416	中国名による(YList)		
地榆	われもかう、だんごはな	ワレモコウ		Sanguisorba officinalis L.	バラ科	Rosaceae	3143	かな解読および中国名(YList)による。		
葛勒子葉	やゑむくら	ヤエムグラ		Galium spurium L. var. echinospermon (Wallr.) Desp.	アカネ科	Rubiaceae	3352	かな解読による。		
馬蘭頭	こんきく、よめなの類	ノコンギク	インドヨメナ	Aster microcephalus (Miq.) Franch. et Sav. var. ovatus (Franch. et Sav.) Soejima et Mot. Ito	キク科	Asteraceae	3403	かな解読による。宮城県に最も普通なコンギクの仲間の一つ。	1	
馬蘭頭	こんきく、よめなの類	シロヨメナ	インドヨメナ	Aster ageratoides Turcz. var. ageratoides	キク科	Asteraceae	3403	かな解読による。宮城県に最も普通なヨメナの仲間の一つ。	1	
馬蘭頭	こんきく、よめなの類	ユウガギク	インドヨメナ	Aster iinumae Kitam.	キク科	Asteraceae	3403	かな解読による。宮城県に最も普通なヨメナの仲間の一つ。	1	
稀薺	めなもみ	メナモミ		Sigesbeckia pubescens (Makino) Makino	キク科	Asteraceae	3403	かな解読および中国名(YList)による。	1	
稀薺	めなもみ	コメナモミ		Sigesbeckia glabrescens (Makino) Makino	キク科	Asteraceae	3403	かな解読および中国名(YList)による。	1	
竹節菜	つゆくさ	ツユクサ	ツキクサ、ボウシバナ	Commelina communis L.	ツユクサ科	Commelinaceae	3078	かな解読による。	1	
歪頭菜	ふたはゝき	ナンテンハギ	フタバハギ、アズキナ	Vicia unijuga A. Braun	マメ科	Fabaceae	3140	中国名(YList)、およびかな解読による植物名の別名(YList)による。	1	
兎児酸	さぐらたで	サクラタデ		Persicaria odorata (Lour.) Sojak subsp. conspicua (Nakai) Yonek.	タデ科	Polygonaceae	3283	かな解読による。		



飢饉食糧植物								推定根拠	分布状況	
表記	かな解説	推定和名	別名	YList学名	科				二戸	
					科名	学名	APG		分布	栽培
𦵏蓬	まづな	マツナ	シマハママツナ	Suaeda glauca(Bunge) Bunge	ヒユ科	Amaranthaceae	3297	かな解説および中国名(YList)による。		
𦵏蓬	まづな	ハママツナ	シマハママツナ	Suaeda maritima(L.)Dumort. subsp. asiatica H. Hara	ヒユ科	Amaranthaceae	3297	かな解説および中国名(YList)による。	1	
藺蒿	しどけ	モミジガサ	シドケ、キノシタ	Parasenecio delphiniiifolius (Siebold et Zucc.)H. Koyama	キク科	Asteraceae	3403	かな解説による植物名の別名(YList)による。	1	
水蒿苳	かわちさ	カワヂシャ	カワヂサ、カワジサ	Veronica undulata Wall.	オオバコ科	Plantaginaceae	3370	かな解説および中国名(YList)による。		
水辣椒	とよぎ	オトコヨモギ		Artemisia japonica Thunb.	キク科	Asteraceae	3403	かな解説の植物の方言による(宮城県植物誌)。中国名は『中国高等植物圖鑑』(第一冊)ではシマキツネノボタン R. sieboldii Miq. に当てられている。シマキツネノボタンは宮城県には分布しない。	1	

第一部、第二部の作業手順を整理したものが下記の図 4 である。

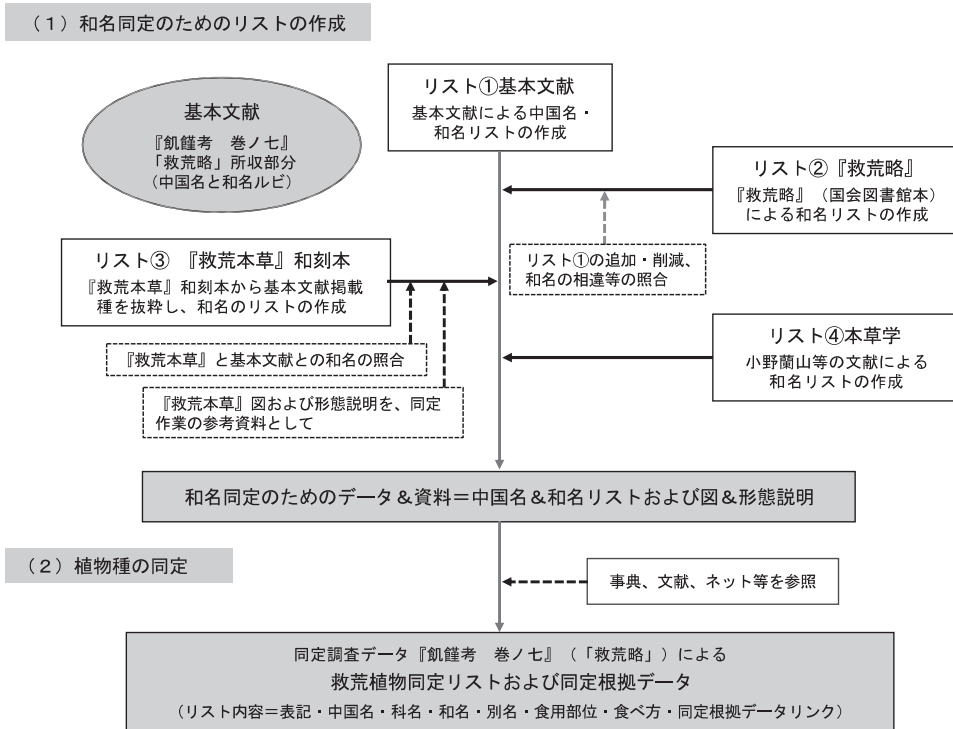


図 4 植物種同定の手順

### 3. 「救荒作物調査プログラム」の作成(第三部)

#### (1) 救荒作物調査プログラム設計の前提

東北地方で救荒作物の調査を行う場面を想定して、Excelでマクロを組み、「救荒作物調査プログラム(Excelファイル)」を作成した。Excelファイルであれば、多くのPCにインストールされていることも多く、実際使用する場面で多少のトラブルがあっても、別のPCを利用して、調査を継続できる可能性が高いと判断した。

まず救荒作物調査プログラムを使って、どのようなデータを取得するかについて説明する。本研究については、冒頭に述べたように、植物リストの抽出から始めなければならなかった。植物リストは、第一部および第二部で述べたように注意をはらって作成したが、実際に現地でどのように植物を救荒作物として利用してきたのかは、明確には把握できていない。よって、その植物を知っているか、食べていたか、といった情報はもちろん必要であるが、それ以外に、利用の仕方などを、被験者に自由に語ってもらい、そこからさらなる情報を引き出す必要があると考えた。

そこで、把握すべき内容としては、植物を「知っているか?」、「食べたことはあるか?」、「どの部分を食べていたか?」、「どのようにして食べていたか?」、「(植物にまつわる)思い出」を尋ねることとした。また同時に、被験者の「年齢」、「現在の住所」、「現在の住所に何年くらい住んでいるか」、「昔住んでいた住所(複数ある場合は、その中で最も長いところ)」を尋ねるようにした。(これらを「被験者属性」と言う。)これらを把握することによって、どの地域で、どれくらい、いつごろ、どのように、救荒作物を食べていたかが把握できると考えた。「知っているか?」、「食べたことはあるか?」、「年齢」、「現在の住所に何年くらい住んでいるか」については、段階的な選択肢を用いて把握し、「どの部分を食べていたか?」、「どのようにして食べていたか?」、「(植物にまつわる)思い出」については、自由に記述してもらった。使用した段階的な選択肢については、図4あるいは、図6に示した通りである。

次に、ここで挙げた質問内容をどのような場面で尋ねるかということである。救荒作物調査プログラムを考える上では、ふたつの場面を想定した。ひとつは、調査者がある家庭を訪問し、救荒作物についての写真を提示しながら、調査者が被験者と話をし、質問に対する回答を聞き出していくという場面である。これは、半構造化インタビュー的な方法を想定している。もうひとつの想定される場面は、ある地域に入り、例えば公民館などに被験者の方に集まっていただき、救荒作物の写真をスライドなどで投影し、それについて、質問に対する回答を聞き出していくという場面である。前者を「ひとりずつの調査」、後者は10人程度の被験者が集まると考え「10人ずつの調査」としておく。いずれにしても、作物の名前を言うだけでは、被験者が思い出しにくいかも知れない。よって調査をするときには、写真を示すことが望ましく、救荒作物調査プログラムでは、このことを十分考慮した。調査の際は、調査者がノートPCを持参し、話をしながら必要な情報を集めていくことになる。よって、救荒作物調査プログラムを動かしているときに、写真が現れる、あるいは現すことができるようにしておくことが必要と考えた。

#### (2) 救荒作物調査プログラムの概要

(1)の内容を踏まえて、救荒作物調査プログラムを作成した。表6をもとに、救荒作物調査プログラムで使う、救荒作物のデータベースを作成した(表7参照)。

表 7 救荒作物調査プログラムのデータ

1	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	U	V	W	X	Y	Z	AC	AD
2	ID	No.	種別	表記	かな解説	確定名	別名	VList学名	科			確定表	分布状況		増化植物		その他		質問紙用写真ファイル			
3									科名	学名	APG		分布	栽培	逸出	増化	栽培	特定不可	総称	集合名	写真1	写真2
4	1001	1	草	野生菜	さんくは	アキノキリンソウ		<i>Solidago virginica</i> L. subsp. <i>asiatica</i> (Nakai ex H. Hara) Kitam. ex H. Hara	キク科	Asteraceae	3403	かな解説による植物名の別名	1								アキノキリンソウ 1.jpg	
5	1002	2	草	割面菜	のあきみ	ノアザミ		<i>Cirsium japonicum</i> Fisch. ex DC.	キク科	Asteraceae	3403	かな解説による	1								ノアザミ 1.jpg	
6	1003	3	草	大薊	おるあきみ	ナンブアザミ		<i>Cirsium makinoi</i> Kadota	キク科	Asteraceae	3403	宮城県に最も普通なアザミ類	1					1			ナンブアザミ 1.jpg	
7	1004	4	草	大薊	おるあきみ	ノハラアザミ		<i>Cirsium siliquosum</i> (Franch. et Sav.) Matsum.	キク科	Asteraceae	3403	宮城県に最も普通なアザミ類	1					1			ノハラアザミ 1.jpg	
8	1005	5	草	山萵菜	こまのひざ	イノゴチ	アオビユ	<i>Achyrocline satureioides</i> Blume var. <i>japonica</i> Miq.	ヒユ科	Amaranthaceae	3297	かな解説による植物名の別名 (ネット情報)	1					1	1		イノゴチ 1.jpg	
9	1006	6	草	山萵菜	こまのひざ	ヒナタイノゴチ	アオビユ	<i>Achyrocline satureioides</i> Blume var. <i>laurea</i> (H. Lév. et Vaniot)	ヒユ科	Amaranthaceae	3297	かな解説による植物名の別名 (ネット情報)	1					1	1		ヒナタイノゴチ 1.jpg	
10	1007	7	草	山萵菜	こまのひざ	オキナグサ	アオビユ	<i>Pulsatilla cernua</i> (Thunb.) Benthoidt et J. Presl	キンポウゲ科	Ranunculaceae	3111	かな解説による植物名の方言 (宮城県植物誌)	1					1			オキナグサ 1.jpg	
11	1008	8	草	黄薺	にわなぎ、みらしば	ミチヤナギ	コフヤナギ	<i>Polygonum aviculare</i> L. subsp. <i>aviculare</i>	タデ科	Polygonaceae	3283	中国名 (V. List)、およびかな解説による植物名 (にわなぎ、みらしば) による。イノゴチは宮城県の方言 (宮城県植物誌)。	1								ミチヤナギ 1.jpg	
12	1009	9	草	石竹子	なでしこ	カラナデシコ	カラナデシコ	<i>Dianthus superbus</i> L. var. <i>longicalcaratus</i> (Maxim.) F.N. Williams	ナデシコ科	Caryophyllaceae	3295	かな解説による植物名の別名 (V. List)	1								カラナデシコ 1.jpg	
13	1010	10	草	紅花菜	こうはな	不明	スエウミハナ															
14	1011	11	草	雲草	くわんさう	ベンテイカ	ウスレグサ	<i>Hemerocallis dumortieri</i> O. Morren var. <i>exoniensis</i> (Koidz.) Kitam. ex M. Matsuzaki et M. Hotta	ススキノキ科	Xanthorrhoeaceae	3073	かな解説および中国名 (V. List) による。	1						1		ベンテイカ 1.jpg	ベンテイカ 2.jpg

Excel ファイルに「DATABASE」というシートを作成し、第一部、第二部で整理・作成された植物リストを基に一覧できるようにした。表中のAC列、AD列に「質問紙用写真ファイル」という列があるが、被験者に示す植物の写真に別用し、植物リストの情報と関連づけている。これらの写真については、草本については、『山溪カラー名鑑 日本の野草』[1]、樹木については、『山溪カラー名鑑 日本の樹木』[2]から引用した。これは、信頼できる本などを基にして、調査をした方が、さまざまなところから寄せ集めた写真を使うより、後の検証で有利であると考えたからである。ただ、これらの本に記載されている現在の名前と植物リストに使われていた名前が違う可能性もあったので、植物生態学を専門に研究する研究者に確認をとり、データベース (DATABASE シート) を完成させた。

この「救荒作物調査プログラム」を起動すると、図5のような画面が起動するようにした。このアイコンをクリックすることによって、先に示した「ひとりずつの調査」と「10人ずつの調査」を選択できるようにした。



図5 救荒作物調査プログラム起動時の画面

「ひとりずつの調査」を選択すると、図5のようなウィンドウが現れる。図5の中のC列に、調査で認識を問う救荒作物を選択できるようになっている。選択はD列に「1」を入力して行う。ここでは、一度の調査では、被験者ひとりにあまり多くのことを尋ねるのは難しいと考え、10種類の救荒作物が選択できるようにした。(10種類が最高で、必ずしも10種類選択しなくても良い。)

調査で使う救荒作物を選択して、図6の左上にある「調査開始」というアイコンをクリックすると、調査用の画面が現れる。まず被験者属性(図3－4のタブでは「回答者情報」となっている)を入力するページが現れ(図6参照)、タブを切り替ええると、図7のように、救荒作物に関する回答を入力する画面が現れるようになっている。

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N
1	調査開始	リセット	質問紙に使用		表記	科名	推定和名	別名	質問紙用写真ファイル		二戸		備考	
3	ID	No.	種類	10					写真1	写真2	分布	栽培	1	2
4	1001	1	草		野生姜	キク科	アキノキリンソウ		アキノキリンソウ1.jpg		1			
5	1002	2	草		割田菜	キク科	ノアザミ		ノアザミ1.jpg		1		同定根拠Wordファイルがない	
6	1003	3	草		大薊	キク科	ナンブアザミ		ナンブアザミ1.jpg		1		同定根拠Wordファイルがない	
7	1004	4	草		大薊	キク科	ノハラアザミ		ノハラアザミ1.jpg		1		同定根拠Wordファイルがない	
8	1005	5	草		山苧菜	ヒユ科	イノコヅチ	アオビユ	イノコヅチ1.jpg		1			
9	1006	6	草		山苧菜	ヒユ科	ヒナタイノコヅチ	アオビユ	ヒナタイノコヅチ1.jpg		1			
10	1007	7	草		山苧菜	キンポウゲ科	オキナグサ	アオビユ	オキナグサ1.jpg		1			
11	1008	8	草		蕺菜	タデ科	ミチヤナギ	ニワヤナギ	ミチヤナギ1.jpg		1			
12	1009	9	草		石竹子	ナデシコ科	ガウラナデシコ	カラナデシコ	ガウラナデシコ1.jpg		1			
13	1010	10	草		紅花菜	不明	スエツムハナ							
14	1011	11	草	1	雪草	ススキノキ科	ゼンテイカ	ワスレダサ	ゼンテイカ1.jpg	ゼンテイカ2.jpg	1			
15	1012	12	草		雪草	ススキノキ科	ノカンゾウ	ワスレダサ	ノカンゾウ1.jpg		1			
16	1013	13	草		雪草	ススキノキ科	ヤブカンゾウ	ワスレダサ	ヤブカンゾウ1.jpg		1			
17	1014	14	草		白水龍苗	タデ科	オオクダヂ	オオベニタヂ	オオクダヂ1.jpg		1			
18	1015	15	草	1	威靈仙入	オオバコ科	クガイソウ		クガイソウ1.jpg	クガイソウ2.jpg	1			
19	1016	16	草		馬兜鈴	ウマノスズクサ科	ウマノスズクサ		ウマノスズクサ1.jpg		1			
20	1017	17	草		旋覆花	キク科	オグルマ		オグルマ1.jpg		1			
21	1018	18	草		蛇床子	セリ科	ハマゼリ	ジャコウソウ	オカゼリ1.jpg		1			

図6 救荒植物調査プログラム「ひとりずつの調査」の調査準備画面

被験者属性については、先に述べたとおりである。回答を入力する画面(図7)には、常に、写真が大きく表示されるようにしてある。被験者はこの写真と右側に出ている「種類」、「表記」、「科名」、「和名」、「別名」とで救荒作物を認識してもらう。そして、下に表示されている質問に答えていただくという形にしている。



UserForm1

調査No. 1 入力

回答者情報 作物1 | 作物2 | 作物3 | 作物4 | 作物5 | 作物6 | 作物7 | 作物8 | 作物9 | 作物10 |

あなたの年齢を教えてください

☐ 〇～39 歳 ☐ 40～49 歳 ☐ 50～59 歳 ☐ 60～69 歳 ☐ 70～79 歳 ☐ 80～89 歳 ☐ 90 歳～

ご住所を教えてください

都道府県  市区町村  それ以下

現在のご住所に何年くらいお住まいですか

☐ 〇～19 年 ☐ 20～29 年 ☐ 30～39 年 ☐ 40～49 年 ☐ 50～59 年 ☐ 60～69 年 ☐ 70 年～

昔住んでいた ご住所を教えてください(複数ある場合は、その中で最も長いところをお答えください)

都道府県  市区町村  それ以下

図 7 救荒作物調査プログラム「ひとりずつの調査」の被験者属性(回答者情報)入力画面

UserForm1

調査No. 1 入力

回答者情報 作物1 | 作物2 | 作物3 | 作物4 | 作物5 | 作物6 | 作物7 | 作物8 | 作物9 | 作物10 |

種類: 草  
表記: 萱草  
科名: ススキノキ科  
和名: ゼンテイカ  
別名: ワスレグサ

どの部分を食べていましたか?

どのようにして食べていましたか?

何か悪い出なごありますか?

この作物のことを知っていますか?

☐ とてもよく知っている ☐ 見たことがあり、名前も知っている ☐ 見たことはある ☐ 知らない

この作物のことを食べたことはありますか?

☐ よく食べていた ☐ 食べたことはある ☐ 他人が食べているのを見たことはあるが、自分は食べたことはない ☐ 食べているのを見たことも、食べたこともない

図 8 救荒作物調査プログラム「ひとりずつの調査」の回答入力用画面

図 6 で「10 人ずつの調査」を選択すると、図 8 のようなウィンドウが現れる。ウィンドウの右半分(タブに関係ない部分)は、左半分にあるタブを変更しても、常に同じように表示されている。つまり救荒作物の写真や「種類」、「表記」、「科名」、「和名」、「別名」は常に被験者に提示されるようにしてある。これで、被験者に救荒作物をしっかりと認識できるようにした。

図9 救荒作物調査プログラム「10人ずつの調査」の被験者属性(回答者情報)入力画面

右半分のところ、まず、10人の被験者に見せたい救荒作物を、IDを使って選択する。IDは図5のA列に表示されているものである。IDを入力し、「IDセット」のボタンをクリックすると、写真が現れ、そこから、調査ができるようになっている。ここでは10人分の被験者属性を入力するところから始められるようにしている。

図10 救荒作物調査プログラムの「10人ずつの調査」の調査対象の提示画面



ここで、10人ごとの調査では、公民館などでプロジェクターを使って、被験者に写真を見せることを想定しているの、図10のような、植物が大写真になるようなタブも用意した。

「10人ずつの調査」では、10人分の回答が一度に入力できるようにした(図11参照)。入力調査者が行うことを想定しているの、一括で入力できるようにした、ということである。ここには表示しないが、「食べ方」や「思い出」といった自由記述の箇所についても、空欄が10人分現れるようになっている。

図11 救荒作物調査プログラム「10人ずつの調査」の回答入力用画面

「ひとりずつの調査」、「10人ずつの調査」いずれにしても、入力が終われば、「入力」というボタンをクリックすれば、図12に示す「調査結果」シートにデータが蓄積されていく仕組みになっている。これで調査が完全にうまくいくかは不明な部分もあるが、被験者に配慮しつつ、必要な情報を集める仕組みは用意ができたと考えている。

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O
1	調査	年齢	現住所			居住年数	かつての住所			ID	認識	食べた経験	作物1	調理方法	思い出
2	No.		都道府県	市区町村	それ以下		都道府県	市区町村	それ以下				食べた部位		
3	1	-39歳				-19年					とてもよく知っている	よく食べていた			
4	2	40-49歳				20-29年					見たことがあり、 名前も知っている	食べたことはある			
5	3	50-59歳				30-39年					見たことはある	他人が食べていた			
6	4	60-69歳				40-49年					知らない	食べたことはない			
7	5	70-79歳				50-59年									
8	6	80-89歳				60-69年									
9	7	90歳-				70年-									
10	1														
11	2														
12	3														
13	4														
14	5														
15	6														

図12 救荒作物調査プログラムの調査結果集約画面

## おわりに

本来であれば、本研究成果から作成したプログラムを用いて地域住民対象の救荒作物認識調査と、さらに現在地域でどのように食生活に活用されているのか、それは古文書に記載されている食し方とどのように違っているのかの現地調査を実施する予定であったが、コロナの関係で現地入りすることが困難となっている。今後、新型コロナウイルス感染拡大の状況を見て現地調査を実施し、調査手法の確立を試みる予定である。

本研究は、災害に際して人間が生み出した知恵とその継承に焦点をあてた研究である。しかし、分析を進める過程で、救荒の知恵から生まれた食材や食べ方が、その地方固有の食文化の形成に直結している可能性があることに気づいた。食は観光資源としても重要な存在であるが、そのオリジナリティの原点が救荒作物、すなわち身近な植物で子孫を生かそうとする先達の知恵にあったことを示唆する。観光を通して光を当てることは、このようなローカルな知恵に改めて気づき、時を超えたその文化の継承を見つめなおすことにつながるといえよう。災害復興の伝承と地域文化と観光の関わりに対する大きなヒントがここにある。そして、これが日本の特定の地域だけに適用される視点ではなく、グローバルなアプローチであるといえる。

## 謝辞

本研究は、次に挙げる各研究者の知見と協力を得て実施し得たものである。真板昭夫(第1章)、比田井和子(第2章1)、広沢毅(第2章2)、黒沢高秀(第2章2)、濱泰一(第2章3)。なお本研究はJSPS科研費19H04383および文教大学国際学部共同研究費(2020)の助成を受けたものである。

## 注

1) 続く「4つの自」は、地域社会を再建するために必須となる自由、自治、自立、自尊である。

## 参考文献

- [1] 浅見恵・安田健編(2006)『救荒【1】』救荒本草(和刻本)、救荒本草、救荒本草啓蒙、救荒本草通解、救荒野譜(和刻本)、民間備考録、備考草木図、「近世歴史資料集成 第Ⅳ期 第10巻」、株式会社科学書院
- [2] 小野職博(蘭山)口授、『救荒本草』(「救荒本草上」「救荒本草下」「救荒野譜」)の3部構成、『救荒Ⅰ』、pp.237-323
- [3] 小野職孝(蕙畝)口授『救荒本草啓蒙』・『救荒野譜啓蒙』、『救荒Ⅰ』、pp.235-549
- [4] 佐々城朴安撰(1833)『医学校御役附 御医師中鑑定 救荒略 全』、国会図書館デジタルアーカイブ
- [5] 菊池勇夫(1997)『近世の飢饉』、日本歴史学会編『日本歴史叢書』、吉川弘文館
- [6] 白杉悦雄(1995)「日本における救荒書の成立とその淵源—建部清庵『民間備考録』を中心に—」、山田慶兒編『東アジアの本草と博物学の世界』上、1995、思文閣出版、pp.138-173
- [7] 白杉悦雄(1996)「『救荒本草』考」、『中国思想研究』、1996.12-25、pp.211-230
- [8] 建部清庵(1796)「民間備考録」、大阪書林(河内屋八兵衛／丹波屋助七)、井上幸三編『解版民間備考』、平成7年(1995)再版、岩手植物の会
- [9] 谷謙二(2012)小地域別にみた東日本大震災被災地における死亡者および死亡率の分布、埼玉大

- 学教育学部地理学研究報告32号(埼玉大学)、pp.1-26
- [10]松岡校訂「救荒本草」和刻本(1716)朱王櫛著・松岡玄達校訂、『正補合併 周憲王救荒本草』(和刻本)、皇都書補、柳枝軒／白松堂／含翠亭、『救荒Ⅰ』、pp.5-235
- [11]林弥栄、畔上能力、菱山忠三郎(1983)：林弥栄編集『山溪カラー名鑑 日本の野草』：山と溪谷社
- [12]林弥栄、畔上能力、菱山忠三郎(1985)：林弥栄編集『山溪カラー名鑑 日本の樹木』：山と溪谷社
- [13]松岡校訂「救荒野譜」和刻本(1716)王西樓輯・姚可成補『救荒野譜』皇都書補 白松堂寿梓、『救荒Ⅰ』、pp.807-882
- [14]溝田浩二(2015)、救荒植物を利用した食教育・環境教育・防災教育の可能性、環境教育研究紀要第17巻、宮城教育大学、pp.5-11
- [15]室崎益輝(2021)復興と文化と観光、「復興のエンジン」としての観光、創成社、p4
- [16]横川良助(1984)「飢饉考 卷之七(食類)」のうち「救荒略」、岩手県図書館編『岩手史叢 第8巻 飢饉考』、昭和59年、岩手県文化財愛護協会、pp.459-462
- [17]横川良助(江戸後期)『飢饉考』「序」および「飢饉考の刊行に寄せて」、岩手県図書館編『岩手史叢 第8巻 飢饉考』、pp.4-19

## 参考サイト

- [18]一般社団法人日本雑穀協会、<https://www.zakkoku.jp/aboutassociation>、2021年5月9日閲覧

## (参考)本研究で使用了文献の概要

### ①横川良助著『飢饉考 卷之七(食類)』

『飢饉考』は9巻からなる。主に南部藩の三大飢饉と言われる宝暦5年、天明3年、天保4年の飢饉の状況を記録している。天候など稲農作物の生育状況、米穀類の価格の高騰、藩の対策、民衆の窮状など、飢饉の状況を編年的に(年に従って、また正月から十二月まで月を追って)記述しており、これが本書の大部分をなす。これに加えて、飢饉を生き延びる一つの術として、「卷之七(食類)」の部が置かれている。「卷之七(食類)」には②佐々城朴安著『救荒略』の全体が収録されており、その中に救荒植物名が列記されている。本調査では、これをリスト化し、基本資料として利用する。

後述の通り、『救荒略』からの脱落が6種類あり、掲載されている植物は197種である。

横川良助<sup>1</sup>(安永3年・1774～安政4年・1858)は算学者・郷土史家である。南部藩士の平格の家に生まれたが、生来病弱のため、生涯独身で、職につかず、盛岡の大慈寺住僧恵観の知遇を得て、同寺の寓居で亡くなった。史家としては、主著『内史略』44巻(前編24巻、後編20巻)、『見聞随筆』17巻、『飢饉考』9巻を残している。

### ②佐々城朴安撰『救荒略』

後述するように横川良助著『飢饉考 卷之七(食類)』の原本であることから、参照文献とした。掲載されている植物は203種である。救荒本草・救荒野譜を出典としていること、および東北地方で得やすく、かつ食用にできることをあまり知られていない植物であることという選択基準を明らかにしている。救荒植物について、より広い知識を民衆に与えようとの目的からであろうか。

佐々城朴安(天明5年・1785～文久元年・1861)は、仙台藩医員、医学館付属薬園長、婦人科教

授。京都で婦人科学を学び、文化11年(1814)に仙台藩の医員となる。

### ③『救荒本草』和刻本・『救荒野譜』和刻本

③周定王櫛編纂『救荒本草』は、凶年飢饉に食用に供することのできる野生植物414種を収録する。和刻本は、松岡玄達が漢文に訓点を施し、和名を記入し、所々に自説を加え、『救荒本草』と『救荒野譜』(王西樓輯)の合刻本として刊行したものである。

名称と図があり、①名称、②原産地、現生地、③形状、④五味(酸・苦・甘・鹹)、四気(寒・熱・温・涼)、有毒無毒、⑤救荒(食べ方)の順で説明される<sup>2</sup>。和名は、本文の名称の横にカタカナのふりがなによって表記される。和刻本では、所々に、「玄扈先生曰」として自説(コメント)を加えている。食べられるものと、食べられないものの識別を可能にするため、形状についての説明が詳しい。食べ方についての説明は簡単である。救荒書の基本文献であるとともに図が掲載され、図説集であることから採用した。

『救荒本草』の意義<sup>3</sup>について、白杉1995では、次のような点をあげている。

- ・本書により「救荒植物」という概念がつくられた。
- 「救荒」という有用性の発見によって、農学における「食用」、本草学における「薬用」に対して、これまで農学と本草学の間隙にあって見過ごされていた多くの身近な植物が再発見された。
- ・すべてを園圃に植えて実際に観察して描いており、正確であること。
- ・農民たちが経験的にもっていた知識を記録した。
- ・飢饉の際に真っ先に困窮する民に知識を提供する。

『救荒本草』和刻本は、和名が同定されていない種が少なからずみられた。『救荒野譜』は、もともと掲載種も120種と少なく、『飢饉考 卷之七』所収の種類と重なる部分は極めて少なかった。和名が異なるものが2、3あったが、図があることから、植物種の同定作業において必要に応じて参照する文献とした。

また『飢饉考 卷之七』および『救荒略』には掲載されている山薺樹(カンホク)は、和刻本からは脱落しており<sup>4</sup>、和刻本は413種の掲載となる。

松岡玄達(寛文8年・1668～延享3年・1764)は、儒学者・本草学者で京都の人。山崎闇斎、伊藤仁斎に儒学を、稻生若水に本草学を学ぶ。享保6年(1721)、江戸幕府によって招聘され薬物鑑定に従事した。門下からは、「日本のリネン」とも称される小野蘭山をはじめ、その後の本草学を担う人材を輩出している<sup>5</sup>。著書多数。

### ④小野職博(蘭山)口授『救荒本草』『救荒野譜』『救荒野譜補遺』

小野職孝(小野蘭山の子息)口授『救荒本草啓蒙』『救荒野譜啓蒙』

上記③を補足し、日本の救荒植物についての知識を補足するものとして採用した。いずれの書も、図はない。小野職博(蘭山)口授の書は、日本に生育する約520種についての簡単な解説書。中国名と和名の交合、日本種の形態や生態について記述する。

小野職孝(小野蘭山の子息)口授書は、蘭山の遺志をつぎ子息が成立させた書。『救荒本草』414種、『救荒野譜』120種の、両書の重複をのぞき、合わせて480種が記載されている。植物の形態、生態、薬用方法、異名、方言名、類似品、引用文献等について記述。可食部位と調理法についての記載はない<sup>6</sup>。

③において脱落していた山薺樹(カンホク)は、『救荒本草啓蒙』では、目録にはないが、本文に

は掲載されている。

小野蘭山は、中国の本草書『本草綱目』(李時珍 万暦 6 年・1578 成立)を基本としながらも、日本の動植物などを加えた『本草綱目啓蒙』48 卷(享和 2 年・1802)を著した草学者である。和名同定のための参考文献として有効と考え採用した。

#### (注)

1. 『飢饉考』序, p4-5
2. 『救荒本草』については白杉1995, および1996を参照した。
3. 白杉1995, p.14
4. 『救荒 I』書誌解題, p.1056-1057
5. この項、wikipedia「松岡恕庵」、「コトバンク」掲載諸事典を参考にした。
6. ④文献についての概要は、『救荒 I』書誌解題, p.1060を参照した。

#### 要約

幾度となく地震や津波、飢饉に襲われてきた東北地方では、江戸時代より、人々が生き続けるために、非常時に何を食べて生きのびたら良いかを示すガイドブックが伝えられてきた。その書物に示された植物は、今日の北東北の日常食においてどの程度継承され、生かされているのだろうか。このことを明らかにするために、岩手県二戸市で現地調査を行うこととした。本研究ノートはその調査方法を構築するプロセスを明らかにしたものである。手順は、古文書に記されている植物リストを現存植生と照合してリストを作り、リストアップされた植物の写真資料を図鑑等から抽出し、その場で回答と記入を同時に行える質問紙をエクセルを用いて設計した。

